

— 次の文章を読んで、問いに答えよ。

いま高校生は何を考え、どんな生活をしているのだろう。大雑把な見当はもちろん付くが、それはあくまでも「大雑把な」見当にすぎない。高校生もことよつたら、ネリリし、キルルし、ハララしているか。

何？ なんだこれとは、いまおおかたの人は思ったのではないだろうか。そしてごく少数の人が、あれだな、とかつて読んだ詩を思い出して微笑を浮かべる……。

そう、これは谷川俊太郎氏が十代のときに書いた詩に出てくる。火星語なのである。

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリし キルルし ハララしているか)

しかしときどき地球に仲間をほしがったりする

それはまったくたしかなことだ

火星語だから、意味はわからない。ぼくもわからないし谷川さんだってわかって書いたわけではないだろう。なにしろ火星語なのだから。

しかしこれが谷川俊太郎氏が空想した火星語だということを、たとえば高校のクラスの半数が知っていたらどうだろう。さらに大手企業のサラリーマンの十分の一が知っていたら。

これは決してありえない事態だとぼくは思うが、しかしもしそうだったら、人間の生活はもう少し余裕のある、生き生きとしたものになっているのではないだろうか。実利には直接結び付かない記憶と思考の回路が人間にはあり、それはわれわれを深くもすれば活力も与えてくれる大事な源泉なのである。

もうひとつ、別の詩を読んでみよう（／は原文の改行を示す）。

うす汚れた小さな本を／日がな一日読んで

おれも遠いマルセーユから／胸いっぱいの手紙を出したくなった。

若さと苦しみ、／それからわれわれの勇氣について語り得る友、

巴里の、サン・ルイ島の／あの貧しい木靴づくりの息子へ、

一人の娼婦が／泣きながら書いたような切ない手紙を。

一九八八年の三月末に、七十七歳で亡くなった詩人、菅原克己氏の二十代のときの作品「ヘビュビュ・ド・モンパルナス」を
読んで」の一節である。

「ビュビュ・ド・モンパルナス」というのは、十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのフランスの小説家シャルル・ルイ・
フィリップの代表作だが、この詩と、それからフィリップの原作の両方を読んだ二十代のはじめの頃、ぼくはむしろこの詩の方
に感動してしまった。若さと苦しみがあり、将来の展望も開けず、日々 A としているとき、この詩は「さわやかな驟雨^①
のように」ぼくのころを洗ったのである。信頼するに足る年長の友や師が見当たらないのはごくあたりまえのことだが、親しい
同世代の友とも、われわれは普通ころのはなしはしない。実業の世界にいる大人は無論のことだが、十六、七歳の人間のあい
だにあっても、それはなにかしら照れくさく、大人気ないことのように思われるのである。そしてそれはそれとしてみずからの
うちに留めておき、当たり前障りのないつきあいに終始しているうちに、確実に病んで行くものがころというものではないだろ
うか。

シャルル・ルイ・フィリップはこの詩にもあるとおり、貧しい木靴づくりの息子に生まれ、成人してからはパリのへ第七区役
所へ勤めながらいくつもの小さな物語を書いた。「ビュビュ・ド・モンパルナス」は一九〇一年の作品で、ビュビュというの

は若いならずものである。この詩の、残りの二節も読んで欲しい。ちなみにさきほどの第一節は、「手紙」と題されていた。

カフェの対話

よしや、ここにも病氣と貧乏があり、／それからより一層手きびしい世間があっても、
今日、さわやかな驟雨のように／いきいきとおれの心を洗って行くものは
モンパルナスの夕ぐれのカフェ、／そのカフェの片隅にしょんぼり座っている
やさしい二人の対話。

フィリップ

ほら、思案そうな顔をしては／また部屋の中を歩きまわっている。
そして、セバストポールの並樹みち、／提燈のようなお月さんの下で
可哀そうなベルトと話しこむのだよ。／みじめな娼婦も、
その男といると、／まるでういいういしい娘のようになった。

——あれが、ひとり身の、貧しい、／シャルル・ルイ・フィリップさ。

いったいどうして、自分が一生をかけてする仕事は詩を書くことなんだなんて、ぼくは決めてしまったのだろう。はつきりと
そう思い定めたのは十五歳の頃のことだが、それはあれかこれかと迷った末に決めたのではなく、もうこれしかないという感じ^①

だった。中学のときに国語の授業で詩と詩人の存在を知ったのが発端なのだが、ほんきでそれを選び迷わないというのはこれは資質としか言いようがないことなのかも知れない。文学、芸術にかぎらず、少年時代に一生の仕事を決めるといのはべつだん珍しいことではないと思うが、それが詩だということはいささか他とちがっているところがある。画家や音楽家、あるいは小説家とことなり、詩は、いかにいい詩を書いても、また詩人としてどんな存在になっても、それだけでは生活できないということだ。親の脛を齧^{かじ}っているうちはいいが、そのあとは何か他に暮らしの手段をもとめなければならぬ。さもなければ、文字どおり路頭に迷うのである。

こういうことがあらかじめわかっているひとつのジャンルを選び、それに情熱を傾けている高校生というものは特殊な例に属すると思うが、それだけにだれもが経験する親や学校との対立もまた、アイマイさのない、鮮烈なものだったような気がする。

当時、ぼくがたえず言われていたことは、そういうことは趣味として余暇にやれということだった。高校生には高校生としてしなければいけないことが他にある筈であり、さしあたってそれは受験勉強であろう。大学に入ったら、あるいは大学を出て社会人になったら、仕事の合間に、詩でも歌でも書くがいい。それが一般的な人間の生活の仕方であって、お前のように何もかも放擲^{ほうてき}して頭の中を詩だけでいっぱいにしていたら、ほんとうに落伍者になってしまう……。

言われることはぜんぶ身に染みてわかっていたが、ぼくはたいへん焦っていたのでそれらの意見に耳を貸すわけにはいかなかった。まず第一に、生涯に一篇でいいから優れた詩を残したいのに、最も **B** が鋭敏な時期かも知れない十代の終わりを、他のことにかまけて過ごすことができるだろうか。その年齢の人間にしか書けない詩があるとすれば、それはその年齢のときに書かなければならない。よしんばそれが少年の焦燥からの思考にすぎないとしても、いったいだれが、ぼくが三十歳まで生きることを保証するのか。

第二に（これはこの人生で詩を選択する重要な要因になったものだが）、不幸にしてぼくに才能がなくて、結局詩は駄目だとしても——その不幸な自覚は十年二十年と詩にかかわったあと、突然動かしがたい事実として重い石のようにぼくのところに投げ込まれるのではないだろうか——ぼくはこの管理された社会の中で、単に労働力として存在する人間にはなりたくない。たと

え人生を棒に振っても、ある純粹さを保持した、あるがままの人間でありたい……。

昨日のことに明確に覚えている当時の心情をこうして書いてみると、やはりそうとう現実ばなれのした高校生だったなと思う。いま考えればこういう年齢のときはもつとゆったりかまえていてよかつたのだが、その頃はそんな余裕はとでもなくて、母の言葉によれば、「頭の上に何だか毀れやすいガラス細工を乗せているようで、危なっかしくて見ていられなかつた」この高校生は、三年の秋には突然出奔^③するという無謀な事件まで起こし（このことを語ろうとするとほくはいまでも恥ずかしさのために顔に汗が吹き出てくる）、頭上のガラス細工を一瞬のうちに粉々に砕いてしまうのである。

詩のことはさまざまな角度から、どのようにも語ることができるから、なにもこんな風に若年の日のごたごたを書くこともないと、昨日までのほくなら思うのだが、ほくには実は娘が二人いて、そろそろむずかしい年齢になってきたものだから、きみたちの父もまた親や学校と対立したりしてけっこうたいへんだったんだぜと、こんな文章を読むものかどうかわからないが、一度書いておきたくなってしまった。自分の娘に対してさえこんな感じだから、未知の高校生にどう伝わるものかどんと見当がつかない。あるいはこれはあまりに特殊な高校生活かも知れぬと思うが、人間の豊かさあるいは多様さは、どこでどんなやつがどんなことを考えて生きているかわからないというところにもあるものだ。ほくの内面の彷徨と生活上のてんやわんやは、高校卒業後ももちろん続くのだが、そんな状況の中でいつのまにか身につけたのは、単純でしかし深いものに、ごく自然に感動するという精神の姿勢だろうか。

二十年近く前、妹が結婚するとき、一冊の詩集を贈ったが、同じ詩集の中の一編を未知の若い人々に贈りたい。

大人になるというのは／すれっからしになることだと／思い込んでいた少女の頃

立居振舞の美しい／発音の正確な／ステキな女のひとと会いました^④

そのひとは私の背のびを見すかしたように／なにげない話に言いました

初々しさが大切な／人に対しても世の中に対しても^⑦

人を人とも思わなくなったとき／墮落が始まるのね 落ちてゆくのを
隠そうとしても 隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし／そして深く悟りました

大人になってもどきまぎしたっていいんだな／ぎこちない挨拶 醜く赤くなる

失語症 なめらかでないしぐさ／子供の悪態にさえ傷ついてしまう

頼りない生牡蠣なまがきのような感受性

.....

茨木のり子さんの作品「汲む」の前半である。ぼくはこの詩に、二十代の半ばにさしかかった頃出会った。この詩はあの「夕鶴」の女優山本安英さんが、茨木さんにふっと語った言葉がもとになっている作品だが、優れた詩の言葉は、いつでもどこでだれに働きかけるかわからない。この詩を読んだとき、ぼくはすでにいっぱしの酔っぱらいになっていたが、「人を人とも思わなくなったとき／墮落が始まるのね」という茨木さんの優しい語り口は、一瞬^⑧ぼくを肅然とさせたのである。現実とは遠い夢想だが、人間は何歳になっても、「頼りない生牡蠣のような」初々しい感受性を保持できるように、ほんとうは作られているのではないかと、ときどき考えることがある。

（辻征夫「頭上に毀れやすいガラス細工があった頃」による。なお一部を改めた）

注 マルセーユⅡフランス南部の工業都市。 サン・ルイ島Ⅱパリのセーヌ川にある中州。

モンバルナスⅡパリ南部、セーヌ川左岸十四区にある地区。 セバストポールⅡパリの大通りの名。

問1 傍線①、③の読み方をひらがなで書け。

問2 傍線②、④のカタカナを漢字に改めよ。

問3 傍線⑦に「実利には直接結び付かない記憶と思考の回路」とあるが、その説明として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 実質的な意味があるわけではないが、人々の意識を刺激し、日常生活の幅を広げることを可能にする方法
- 2 実質的な機能があるわけではないが、人々の間の意思疎通を可能にし、相互の理解を深める筋道
- 3 実質的な意味があるわけではないが、人々の社会生活を維持するために、共通認識を作り出していく様相
- 4 実用的な意味を持つわけではないが、人々の過去の経験に基づき、知的観念を豊かにしてくれるあり方
- 5 実用的な機能を持つわけではないが、人々の意識のなかで、共有可能な同一経験を想起させる手順
- 6 実用的な意味を持つわけではないが、人々の観念を均質化したうえで、物事の捉え方を多様化する過程

問4 A に入れるのに、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 累々
- 2 恐々
- 3 爛々
- 4 縷々
- 5 悶々
- 6 淡々

問5

傍線①に「もうこれしかないという感じだった」とあるが、筆者が十五歳の時、詩人として生きていく道を選んだ理由として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 詩に対する情熱を抑えることができない自分は特殊な人間であり、詩人になるべくして生まれてきたのだと信じて疑わなかったから

2 十代の間にできるだけ多くの優れた詩を書かなければならないと考え、そのためには労働者として働いている時間の余裕はないと思ったから

3 今の時期にしか書けない詩があるはずだと考えて非常に焦っており、同時に純粹さを失わずありのままに生きていきたいと願ったから

4 三十歳まで生きられる保証などどこにもないことに気づいたため、残りの人生を自分の思うがままに生きていく方がよいと考えたから

5 親や学校と対立してでも自分の夢を実現することが大切だと考えており、大学を出て社会人になるという一般的な人生に意義を見出せなかったから

問6

B

に入れるのに、最も適当と思われる語を、本文中からそのまま抜き出して、漢字三字で書け。

問7

傍線②に「初々しさが大切なの」とあるが、初々しさを失ったらどのようなになると筆者は考えているか。最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

1 頭上の毀れやすいガラス細工を粉々に砕いてしまい、危うさの中の若さが失われてしまうことになる。

2 単純に見えるが深みのあるものに、すなおに感動するという心のあり方を見失ってしまうことになる。

3 何もかも放擲したすれからしの大人となって、人生の落伍者になってしまうことになる。

4 酔っぱらいとなって墮落した自らの姿を巧妙に隠そうとしても、隠し通すことができなくなる。

5 前触れもなく語られた優れた詩の言葉が、いつどこで誰に働きかけるかが認識できなくなる。

問8

傍線⑤に「一瞬はくを肅然とさせた」とあるが、それはなぜか。その理由を述べたものとして、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 茨木のり子の詩の言葉には、人間本来の姿が表現されていると厳粛に受けとめ、自らも改めて真正の人間として生きていくことを深く考えたから
- 2 茨木のり子の詩の言葉には、現実とかけ離れた夢が語られており、一瞬、何を表現しているのか理解できず、戸惑ってしまったから
- 3 いっぱしの酔っぱらいとして気取っていた自分へ、茨木のり子の優しい言葉が、無理に大人びた振る舞いをしなくてもいいと語りかけているように感じたから
- 4 純粋さを保持していると思いついていた自分に、茨木のり子の優しい言葉が、改めて初心を突きつけるように鋭く突き刺さり、自己を見つめ直す気持ちとなったから
- 5 人を人とも思わなくなつて墮落していた自分は、茨木のり子の優しい言葉に、全てを言い当てられたと思い、恥ずかしさのあまり、動揺してしまったから

問9

本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

1 シャルル・ルイ・フィリップの「ビュビュ・ド・モンパルナス」が描き出した、こころの繋がりを求める人間の姿は、二十代の筆者を甚だしく感動させた。

2 若い間は、信用できる年長の友や師に頼るのではなく、親しい同世代の友人と、こころの内をさらけ出して、積極的に付き合わなければならない。

3 詩人として身を立てて生きていくことは、経済的に困窮することが目に見えているが、大学を出て社会人になるという幸福な人生とは別の生き方を樂しむことである。

4 高校生の間は、将来のことを考えつつ、受験勉強に邁進すべきであり、そうしなければ道を誤って真つ当な生活を送れなくなり、人生の目的を見失ってしまう。

5 大人になるということは、世間ずれしたあげく、感動するという精神の姿勢をなくして墮落し、厚かましく悪賢くなるということである。

6 初々しい感性を備えた詩の言葉には、時代を超えて、あるいは場所に関わりなく、それを読んだ者に深い感動を与える可能性が秘められている。

問10

茨木のり子の詩集を、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 新体詩抄 2 鎮魂歌 3 楚囚之詩 4 於母影 5 死刑宣告 6 海潮音

二 次の記事を読んで、問いに答えよ。

かぜで寢床にふせりながら、上原和著『斑鳩の白い道のうえに』（朝日新聞社）という本を読んだ。聖徳太子という日本史で稀有な理想主義的政治家の悲劇を描いた本である。著者の幻想が、手堅い学問的手法に A されて、力作だと思っただ。たまたま新聞を手にしたら、亀井勝一郎賞にきまったと知り、故亀井氏をしのぶのにふさわしい作品だとも思った▼聖徳太子といえ、小学校で習った知識しかない。十人の話を同時に聞きわけられる賢者で、物部氏を滅ぼして仏教を盛んにしたり、十七条の憲法を作った有徳の人だとか、そんな程度だった。おとなになってからの「聖徳太子」は、会ってもすぐお別れしなければならぬ人で、それにあの肖像画に魅力はなかった▼聖徳太子には、暗い影がつきまとっている。十代のときに、血なまぐさい政争に明け暮れた。物部守屋を殺すことに加担し、その所領を自分のものにした。崇峻天皇暗殺では、張本人の蘇我馬子がクーデターに成功すると、二人で推古体制を支える柱になった▼法隆寺は、聖徳太子の血ぬられた手で創建された、と著書はいう。四十九歳で世を去ったが、その前日にお妃に先立たれた。その看病に妻の精根がつきはてるほどの業病だったのだろうか。あるいは梅原猛氏の大胆な推論のように、自殺か、心中だったのだろうか▼その死後三十二年たっても、悲劇は続く。皇位継承の争いに巻き込まれ、聖徳太子の一族二十数人が蘇我入鹿の軍に包囲される。一度は生駒山中に逃れ、挙兵の機会には十分ながら、なぜか一族は斑鳩の里に下りてきて、女も子どもも一族皆殺しにされた▼このときの包囲軍の部隊長はやはりこの計画に関係したともいわれる孝徳天皇に頼んで、法隆寺に寄進をする。権力に狂奔し、怨霊におののく古人たち、いつかもう一度、法隆寺を訪ねてみたい。（一九七五〇昭和五十〇年十一月一日）

深代惇郎の絶筆となった「天声人語」である。

『斑鳩の白い道のうえに』の著者、上原和は、文庫版（朝日新聞社・一九八四年）の「あとがき」において、評者・深代惇郎への追悼も併せ書き残している。

同書奥付にある著者略歴によれば、上原は一九二四（大正十三）年台湾生まれ。九州大学法文学部哲学科卒（美学美術史専

攻)。成城大学教授、とある。

上原はここで、『斑鳩の白い道のうえに』が自身の「遺書」としてあったことに「天声人語」の視線が及んでいることを感受し、書き手の身の上に思いを巡らしつつ、若き日、ともに戦争に身を浸した世代としての共感性に思いをはせている。

予感というのでしょうか。その日の朝の「天声人語」を繰返し読みながら、知己をえたというよろこびとともに、このひともまた、ひそかに死の翳かげのさす日日をいただいているのではないか、という漠然とした不安が、心のうちをよぎりました。私がこの小著を、もしや遺書になるのではないかという思いで書いたその心の暗い底までを、このひとは **B** しまっている、という感慨がわき上がってくるのを禁じえませんでした。

遺書のつもりでといいますと、あるいは不審に思われるかも知れませんが、その当ても硝煙の匂いの消えることのなかった中近東への旅立ちを前にして、私は五十年に近い生涯の心の軌跡を、ひとりの古代知識人の悲劇的運命に托して書いておきたいと思いました。私が訪ねたい古代の遺跡は、いずれも辺境にあります。一年もの長いひとり旅がこたえる年齢にもなっていました。しかし、そればかりではありません。私はいまでも、どんな短い旅に出かける場合にも、それが海外であれ国内であれ、ほとんど習性のように、何ほどこかの覚悟をして出かけずにはいられません。十九歳のときに学業半ばで土浦の海軍航空隊に入隊すべく台北の家を出た、そのときの絶体絶命の思いが、いつまでも心の底ふかく潜在して、ことごとく作用し続けているように思います。

十代の終りに経験したものから、ついに私たちは自由になれなかったという思いは、私と同じ年齢である三島由紀夫の死以後、いよいよ私の胸に深まっております。私には、「天声人語」の筆者が、私たちの世代のそうした暗い翳を敏感に感じとっておられるように思われてなりません。それはこの筆者が、私たちの世代と同じような内的経験をしてくられた方なのか、あるいはいま自分の死の予感のなかで筆をとっておられるのか、そのいずれかのように思われてくるのでした。

この日の「天声人語」と『斑鳩の白い道のうえに』は、いわば二つの遺書の交わりでもあったのだ。やがて上原は筆者の名を知り、葬儀にも列席し、その歩みを知って感慨を深くする。

まもなく私は、そのときの天声人語子が、深代惇郎氏であること、そして私の小著の読後感を書かれたあとすぐに入院されたことを聞きました。深代氏がなくなりましたのは、翌月の十七日でした。訃報を夕刊で知り、弔電を打ったあと、私は一晩中書斎にこもっておりました。薄明の斑鳩の白い道のうえを、深代氏の魂魄がひとりゆくのが、私の眼にありありと見えてくるように思われてなりませんでした。絶筆となった深代氏の「いつかもう一度、法隆寺を訪ねてみたい」という結びの言葉が、いまさらながらに想い起こされてくるのでした。

葬儀の日に、遺影の前に立ちながら、私は人と人との運命としかいいようのない出会いの不思議さを思わずにはいられません。知己に出会ったという東の間のよるこびは、たちまちこの相まみえざる友を失うかなしみとなりました。諸行無常、というべきものでありましょう。深代氏がお読み下さった小著には、沢山の書き込みがしてあったといえます。なんとも切ないことです。

なお、これはずっとあとで知ったことですが、敗戦の年、東京府立三中から海軍兵学校に入学し、長崎県の針尾におられたということです。やはりそうだったのか、という感懐を禁じえません。私よりいくらか若かった深代氏の十代の内的経験が、私や三島の世代よりもっと純一無雑に死と差し向いになっていたことは、十分に察せられます。

上原の「あとがき」は、自著をめぐってひとたびは触れ合い、そして相まみえることがなかった評者への深い想いを寄せた、鎮魂のメッセージともなっている。

（後藤正治『天人——深代惇郎と新聞の時代』による。なお一部を改めた）

注 亀井勝一郎はかめいかついちろう（一九〇七～一九六六）。評論家。『大和古寺風物誌』などで古典美とその再興を目指した。

深代惇郎はふかしろじゅんろう（一九二九～一九七五）。新聞記者。『朝日新聞』の一面コラム「天声人語」を一九七三年四月から一九七五年十一月まで執筆した。

問1

A に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 変換
- 2 上書き
- 3 裏打ち
- 4 補佐
- 5 先導
- 6 下ごしらえ

問2

B に入れるのに、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 のぞきこんで
- 2 あばかれて
- 3 ふみこんで
- 4 うがって
- 5 わりこんで
- 6 はらって

問3

傍線⑦の「諸行無常」とほぼ同じ意味のものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 行雲流水
- 2 有為転変
- 3 七転八倒
- 4 流言飛語
- 5 雲散霧消
- 6 無為自然
- 7 生々流転
- 8 天変地異

問4

傍線④に「やはりそうだったのか」とあるが、「そう」の具体的な内容として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 この人も、私と同じく辺境への長い旅が身にこたえる年齢の人だったのだ、ということ
- 2 この人が、限られた生命と向きあいながらあの記事を書いた人だったのだ、ということ
- 3 この人は、私の本が遺書として書かれたことを洞察していた人だったのだ、ということ
- 4 この人も、自分たち同様絶体絶命の思いに身を浸した世代の人だったのだ、ということ
- 5 この人が、私の書いた本を精読して知己として遇してくれた人だったのだ、ということ
- 6 この人は、二人の文章を紙背に徹するまで読みかえず至誠の人だったのだ、ということ

問5

本文の内容に合致するものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 筆者は、深代惇郎の、『斑鳩の白い道のうえに』に関する記事を読んで、自分と同じような死生観を抱いて生きた人の身の上をさまざまに想像して、心が通いあった喜びをかみしめていた。
- 2 筆者は、深代惇郎の「天声人語」を読んで、そこで取りあげられている『斑鳩の白い道のうえに』について、新しい聖徳太子像の提示だと高く評価し、太子への追悼の思いを述べている。
- 3 筆者は、上原和の『斑鳩の白い道のうえに』を読んだ深代惇郎の記事と、それを読んだ上原和の心のふるえを紹介して、実際には会うことのかなわなかった二つの魂の交感を描写している。
- 4 筆者は、上原和の『斑鳩の白い道のうえに』を読んで、「天声人語」でそれを扱った深代惇郎の読みがとてもの確で、自分の心のありようを見とおしていることに、驚きを禁じえなかった。
- 5 筆者は、「天声人語」の記事で扱われている『斑鳩の白い道のうえに』を読み直して、著者深代惇郎が聖徳太子の悲劇を実証的に明らかにしている、著者自身の遺書になっていると思つた。

(このページは白紙)

三 次の文章を読んで、問いに答えよ。

かくて月日はかなく過ぎて、春にもなりぬ。世の中ものどやかなる様なれば、和歌所の人々、少々参りあはれたりしかば、今は世の花も盛り過ぎぬらむと、大内の花散らぬ先にと、やがて引き連れて車二両に込み乗りてまかれり。御階のほどにまどるして、連歌などし侍りて、やがておのおの歌をよむ。花ひと枝折りて歌を置く。中将定家の詠まれたりし、

年を経てみゆきに慣れし花のかげふりゆく身をもあはれと思ふ

はらからに、法橋最栄いざなひ具せられて侍りし、

梢にはなほ大内の山桜風もあだには思はざりけり

これらは良しなど、その座の人々申しあへりしかば、とりわきて記し侍るなり。

さて帰りなむとするに、女房のさし寄りて、「花ひと枝折りて給へ。知らぬ人をば御所守りのいさめ侍る」と申せば、中原宗安、申し掛けし、

折れと言はばいともかしこし桜花あかぬ匂ひを袖にまかせよ
返しも侍りしを忘れにし口惜しさよ。

A の十日余りの月、はなやかにさし出でて、まかり帰る。たつことやすきと誰も誰も思へるに、かごとがましきまで花はこぼれ落つ。月華門のほとりに笙の笛を吹きならしたりしかば、笛をとり出でて吹きあはす。建春門より出でて、待賢門よりおのがじし名残り惜しみてまかり帰りにき。

かく花見に引き連れてまかりぬる由を、院、聞し召して、夜ふくるほどに帰り参りたりしかば、召し寄せて、「誰々か心とまる歌詠めりつる」など問はせ給ふ。この中将の「みゆきに慣れし」と詠めりつる歌を語り申す。「誘はれざりけるこそ口惜しけれ」とて笑はせ給ふ。「うらやまし、明日ゆきてご覧すべし」と仰せあれば、さも参りぬべき際の人々に夢見せにつかはす。

次の日、午の時ばかりに御幸あり。しのびて仰せありつれど、こなたかなたより馬車多く行きちがふは、おひおひ人々の参るなるべし。待賢門より入らせ給ふ。心もとなげに思し召したれば、近き道もはるかなる心地して、沓の声々もいそがはし。さて

花の下に人々近く召し寄せて、「むげに残り少なくなりけり」とて御硯・紙など召し寄す。おのおの歌つかまつるべきよし仰せあれば、人々に紙ども分ち賜ふ。花ひと枝折りて文台にして、おのおの歌を置く。そのたびの御製、

天つ風しばし吹きとちよ花さくら雪と散りまがふ雲の通ひ路

帰らせ給ふに、散りたる花を御硯のふたにかき集めて、摂政殿へ参らせさせ給ひしに添へられたりし、

今日だにも庭をさかりとうつる花消えずはありとも雪とかも見よ

この花を持たせて、三条坊門にわたらせ給ひしかば、参る。「ただいま御院参」とて、御前・御隨身、庭になみ立ちて侍りしを分け参りて、この由を仲資朝臣もて啓し侍りしかば、出でさせ給ひて、御てづから取らせ給ふ。御かへし、誘はれぬ人のためとや残りけむ明日より先の花の白雪とぞ聞き侍りし。

(『源家長日記』より)

注 院 院 後鳥羽院。 摂政殿 藤原良経。この時、三条坊門に居た。

問 1 傍線アの「まどゐして」、㉠の「心もとなげに」を、それぞれ現代語訳せよ。

問 2 傍線イ「風もあだには思はざりけり」とあるが、「あだには思は」ない「風」の歌として、最も適当と思われるものを、

次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 いざ今年散れと桜を語らはむなかなかさらば風や惜しむと (山家集)
- 2 雁がねの帰るは風や誘ふらむ過ぎゆく峰の花も残らぬ (新古今和歌集)
- 3 吹く風の誘ふものとは知りながら散りぬる花のしゐて恋しき (後撰和歌集)
- 4 春風は花のあたりをよぎてふけ心づからやうつろふとみむ (古今和歌集)
- 5 花ちらす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きてうらみむ (古今和歌集)

問3 傍線㉖の「記し侍る」、㉗の「返し」、㉘の「詠めりつる」、㉙の「し覧ずべし」の主体は誰か。それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 作者
- 2 和歌所の人々
- 3 中将定家
- 4 法橋最栄
- 5 女房
- 6 院

問4 傍線㉚の「あかぬ匂ひを袖にまかせよ」の意味として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 どこまで香りの高いものかどうか袖に決めさせなさい。
- 2 花の照り映える姿を袖にうつして下さい。
- 3 袖のなすのに任せてこの照り映える香を楽しみなさい。
- 4 尽きない香を袖にうつして愛でて下さい。
- 5 いつまでも花の香る美しさを保つよう袖に頼みなさい。

問5 Aには旧暦の月名が入る。文章の内容を参考に、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 睦月
- 2 如月
- 3 弥生
- 4 卯月
- 5 皐月

問6 傍線㉛の「かごとがましきまで花はこぼれ落つ」の意味として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 散る花の様子が一行の帰ることを羨むように見える。
- 2 散る花が一行の退出を惜しみ恨むように見える。
- 3 帰る人々に当てつけがましく花が散るように思える。
- 4 帰る人を残念がらせる心持ちで花が散るようだ。
- 5 桜を見て帰る人にこぼれ散る花も同道したいようだ。

問7 傍線㉜の「人々」、㉝の「誘はれぬ人」とは誰のことか。最も適切と思われるものを、それぞれ次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 作者
- 2 和歌所の人々
- 3 中将定家
- 4 女房
- 5 さも参りぬべき際の人々
- 6 摂政殿

問 8 傍線①～⑤の「参る」(各活用形を含む)のうち、一つだけ他と違う意味のものがある。その番号をマークせよ。

問 9 本文の説明として、適当と思われるものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 作者はこの記事をその場で完成させたのではなく、記憶を整理して書いた。
- 2 この記事は、院の花見に参集した和歌所の人々の逸話で構成されている。
- 3 和歌所の人々は、市中の名所と大内において満開の桜を二度楽しんだ。
- 4 大内の花のもと、人々は連歌をし、和歌によせて笙と笛を吹き合わせた。
- 5 院の近習である作者は、摂政殿と対等に歌のやりとりをする仲であった。
- 6 散りゆく花を惜しむ院は、花びらに御製を添えて、摂政殿に届けさせた。

四 次の文章を読んで、問いに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

胡宗甫、妻張氏極妬。元豊中、官京局。母氏常過其家。有リテ小婢、雲英。行酒、与主人相顧而笑。張見而嫌之。婢亦タ覺、是夕、自縊於廁。家人驚告、張飲嚼自如。母氏不シテ遑、乃歸。明年、張之愛女病、作婢語責張。曰、「我由爾死。尚未足道。既聞之、飲食笑樂安忍耶。必令主死。爾諸子繼之、使爾子然無聊、以償我昔A未幾、宗甫捐館、張遽出京、還常州。三子尽亡、姑婦四人孀居。張晚年病癸、宛轉哀鳴、求諸婢、餬飼扶掖、或責以前事。則流涕無語。如是十餘年、乃卒。」

〔萍洲可談〕

注 胡宗甫||人名。 元豊||北宋神宗の時の年号(一〇七八年～一〇八五年)。 京局||政府中央機構の部門。

小婢||未成年女性である使用人。 雲英||使用人の名。 行酒||酒の酌をする。 縊||首をくくる。

自如||いつもどおりのさま。 孑然||孤独なさま。 無聊||貧窮して頼るものがない。

捐館||死去する。 常州||地名。 姑婦||夫の母親と嫁。 ここでは張氏と息子の嫁を指す。

孀居||夫を亡くした身で暮らすこと。 宛転||何度も寝返りをうつ。 舗飼||食事をとらせる。

扶掖||たすける。

問1 傍線①の「是」、③の「尽」の読み方を、送りがなも含めて、それぞれひらがなで書け。

問2 傍線②の「我由爾死尚未足道」の書き下し文として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 我爾なんぢの死しに由よるすら、尚なほ未なだ道いふに足たらず
- 2 我爾の死すること尚ひきしきに由りて、未だ道いふに足たらず
- 3 我爾に由りて死するは、尚なほびたて未だ道いとするに足たらず
- 4 我爾の死に由るは、尚なほびたて未だ道いとするに足たらず
- 5 我爾に由りて死するは、尚なほ未だ道いふに足たらず
- 6 我爾の死すること尚ひきしきに由りて、未だ道いとするに足たらず

問3 A に入る語として、最も適切と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 驚
- 2 歎
- 3 痛
- 4 恥
- 5 夢
- 6 妬

問4

傍線④に「前事」とあるが、その内容として、最も適当と思われるものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 夫の胡宗甫と使用人の雲英が酒の席で楽しそうに笑っているのを、張氏が見て激しく嫉妬し、執拗に雲英を責め自殺させたこと。
- 2 使用人の雲英の霊が病気の娘にとりつき、胡宗甫を早死にさせると言ったのに、張氏が何の手も打たずにその通りになったこと。
- 3 夫の胡宗甫の母親が来た時に、張氏が自分だけいつもどおり楽しそうに食事をして、母親には食事もさせずすぐに帰らせたこと。
- 4 張氏の嫉妬を恐れて使用人の雲英が自殺したにもかかわらず、張氏がいつもと変わることなく食事して楽しそうにしていたこと。
- 5 夫の胡宗甫が死亡したのち、三人の息子も皆亡くなり、張氏が嫁たちと共に暮らしていた時、執拗に嫁たちに意地悪をしたこと。